



TITLE:

海外通信

AUTHOR(S):

川崎, 俊一

CITATION:

川崎, 俊一. 海外通信. 天界 1932, 12(136): 265-267

ISSUE DATE:

1932-07-25

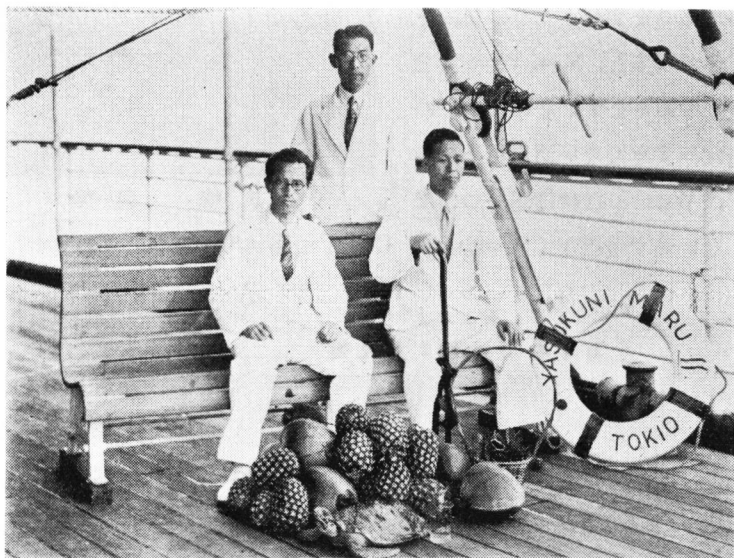
URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161995>

RIGHT:

海 外 通 信

船は明日ロンドンに着きます。航海は始終愉快でした。靖國丸は今度がまだ五回目の航海だといふ程の新しい船で、萬事最新式の設備がしてあり、噸數も12000と申しますから、郵船の歐洲航路では最大のものです。つくづく「大船に乗った心地」といふものを味はひました。「寄らば大樹のもと」、乗らば大きな船。然も季節が丁度よい時で、船は、ナポリに着く前日、ストロン

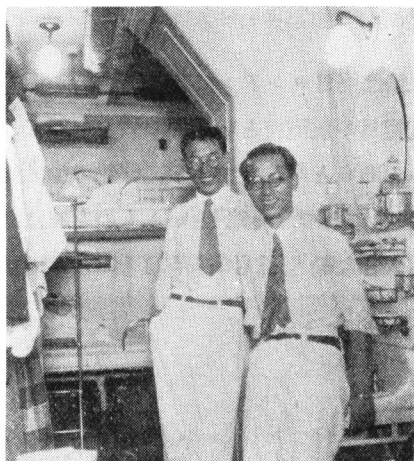


ボリの火山を左に見た頃、すこしゆれたばかりで、極めて平穩な航海でした。従つて船客も頗る多く、ボートサイドから二等はもう超満員といふ有様で、今乗つたばつかりの達者なお客様を病室にまで入れて間にあはせた程でした。船は一等よりもたしかに二等の方が上等です。勿論、船の大部分は一等の方に占領されてゐますし、室や食事にも幾らか色がつけてあるのでせうけれど、二等には一等船客の味はふ事の出来ない一種のなごやかな氣分があります。新村先生なども常にさういつて居られました。二等船客のうち、日本人は十一人でそのうちの八人は學校や研究所に居るまゝいはば學究の徒であつて、他の三人も似たりよつたりの者ですから、大變よく氣心があひまし

たそれが愉快な旅の第一の要素となつてゐた様です。然し三等船客となると悲惨です。船では、三等客は荷物同様に考へてゐるらしく、船客名簿にものせませんし、例へば、又、便所にしても、二等までは Gentlemen, Ladies. で區別して書いてありますが、三等の便所ののぞいてみると、Men, Women で片付けてあります。その代りその Men はうすぎたない浴衣に革のバンド、Women は伊達巻一つのだ

らしい姿で遺憾なく Gentleman, Ladies でない所を發揮してゐます。新村先生は、ほとんど毎日といつていい位に二等の方へお出でになつて、私達と

船 室 に て



川 崎 篠 遠

カイロでピラミッド見物



川崎 内藤 (外人)・徳川夫妻・相澤 河合

お願して、色紙に書いて戴いた歌を御披露しませう。

埃及の女王君臨せる如く金星すめり紅海の空
大船のマストの眞上高光のいかし木星尊きくかも

いつしよに色々な話をして下さいました。先生は星に大變興味をお持ちになつた様でした。そして、丁度、私達の方にも和歌をよむグループがありましたが、先生もすい分澤山およみになつた様です。私が、先生に

日の本に見えぬ南の星々を夜な夜な船に見るがたのしき
 月さゆる白がね色の海の上にサウザンクロス沈みゆくかも
 海の端の闇間に北の一つ星見ゆればこひし大和島根の
 久方のカノプスの星大海のあなたに落ちて夜はふけにけり
 名ぐはしき乙女星座の一つ星光るスピカを見出しにけり

全くこの通りでした。南の海でみた星についてはこれ以上にいふ事はありません。船では、他の船同様に、デツキゴルフ、デツキテニス、麻雀、トランプ等が大流行で、遊ぶ事には決して不自由を致しません。その上、賭事が大

スフィンクスの前



清水 川崎 徳川夫人

流行で、デブラルタルから乗つたイギリスの兵隊さんなんぞ、船が一寸揺れると食堂へ顔も出さない程の弱虫でありながら、スモークキングでは公然とテーブルのまん中に現なまを積んでやつてゐるといふ勇敢さです。外人仲間では、船が正午から次の正午までに走る距離で、毎日バクチをやつてゐます。或日私もさそはれてそれに加はりました。たしかアデンに着く前の日の事です。

負けた所で一シルの損、然し、風は逆風だし、速力も幾分落ちてゐる様だからと勘定して、三百八十哩丁度と賭けました所、不思議にもピッタリとあたつたのは我ながら案外な事でした。然し、そこは、案外そんな顔もせず、天文學者は「おてんと様」の顔を一寸見さえすれば船の位置なんぞすぐ分ると威張つて置きました。この日の賭にあたつた者は五人、寺錢を差引いた残を山分けしました。こんなうまい儲け口にありつくといふのも旅なればこそです。寄港地では、あらゆる機会をとらへて、見るべきものも見るべからざるものもすつかり見物しました。上海の戦跡、シンガボアの月、カイロのピラミッド、ボンベイの死都、それから、マルセイユ、シンガボアのタンジョン・カトンは月の名所です。椰子の木影に月を眺めるといふのは上海を出た頃からのみんなの希望でした。月ならば事「天文學」に関する所。「船がそこへつく頃には必ず月は出してやる」とみんなに約束しておきましたが、その約

束通り、シンガポアでは、十四日の美しい月を仰ぐ事——いやみんなに仰がせてやる事が出来ました。

さて、こゝにお目にかけます寫眞(第265頁)は、そのシンガポアの紀念の寫眞で、前にならんでゐる色々の物は皆その港での獲物なのです。向つて右は名古屋高工の電氣の教授清水君、次が小生、左は東京帝大の植物の博士篠遠君です。電氣と天文と植物。三題漸にもならない様なへんなとりあはせですが、それでゐて、色々の共通點があつて、船では最も親密に團結した三人男です。特に、篠遠君は、「南魚」だの「アルゴ船」だのと、變な事を口走る男だと思つて居りましたら、何ぞはからん、わが天文同好會の會員で、太陽の黒點の觀測もした事があるといふ人です。靖國丸の船客百二十何人、國籍別にしても十何ヶ國になるそうですが、そのうちに二人の天文同好會の會員がゐるといふ事は、十七億の世界全人類のうちに我が會員が二千何百萬かあるのと同じ事で、さう思つただけでも愉快的な事でした。

五月十七日

川 崎 俊 一

帝國學士院の授賞式に參列

帝國學士院長權井博士より、今年初めて、「天文同好會長」としての招待狀を受け、去る五月十日、東京上野公園の學士院内に於ける式場に參つた。今回は第22回の授賞式で、犬養首相、鳩山文相及び一木宮相、其の他多くの來賓參列、倉田一京助(ユリカラの研究)、和達清夫(深所地震)、平井毓太郎(乳兒の腦膜炎)、會田龍雄(メダカの遺傳)、松山基範(重力偏差)、宇田新太郎(超短電波)、菊池正士(電子廻折)、の七氏に夫れ夫れ授賞のことあり、諸大臣の祝辭があつて終り、別室で研究に關する陳列があり、又、茶菓の饗應があつた。因みに、上記松山博士は本會會員である。

山 本 一 清